

区域案 1～4 のまとめ表

第 1 回学区審議会において示させていただいた区域案 1～4 について視点別の特徴を下記に整理した。（なお、最後の頁の表は、視点別の評価表である。）

		区域案 1	区域案 2	区域案 3	区域案 4
区域図					
みらい平地区の 小学校の通学区 域 (案)	視点 1	陽光台小：最大 37 学級 (不足なし・3 教室余裕) (仮)富士見ヶ丘小：最大 33 学級 (不足教室なし)	陽光台小：最大 25 学級 (不足なし・15 教室余裕) (仮)富士見ヶ丘小：最大 44 学級 (不足 11 教室)	陽光台小：最大 29 学級 (不足なし・11 教室余裕) (仮)富士見ヶ丘小：最大 42 学級 (不足 9 教室)	陽光台小：最大 48 学級 (不足 8 教室) (仮)富士見ヶ丘小：最大 22 学級 (不足なし・11 教室余裕)
	視点 2	陽光台小：最大 1.3km …① (仮)富士見ヶ丘小：最大 1.3km …② ①-②の格差 0km	陽光台小：最大 1.0km …① (仮)富士見ヶ丘小：最大 1.5km …② ①-②の格差 0.5km	陽光台小：最大 1.2km …① (仮)富士見ヶ丘小：最大 1.5km …② ①-②の格差 0.3km	陽光台小：最大 1.5km …① (仮)富士見ヶ丘小：最大 1.2km …② ①-②の格差 0.3km
	視点 3	陽光台小人口充足率：73% (仮)富士見ヶ丘小人口充足率：55% 格差 19 ポイント	陽光台小人口充足率：78% (仮)富士見ヶ丘小人口充足率：57% 格差 21 ポイント	陽光台小人口充足率：77% (仮)富士見ヶ丘小人口充足率：56% 格差 21 ポイント	陽光台小人口充足率：73% (仮)富士見ヶ丘小人口充足率：44% 格差 29 ポイント
みらい平地区の 中学校の通学区 域 (案) ※伊奈中＝陽光台小 該当児童が通う ※谷和原中＝(仮称) 富士見ヶ丘小該当児 童が通う	視点 1	伊奈中：最大 23 学級 (不足なし・3 教室余裕) 谷和原中：最大 20 学級 (不足 7 教室)	伊奈中：最大 18 学級 (不足なし・8 教室余裕) 谷和原中：最大 24 学級 (不足 11 教室)	伊奈中：最大 19 学級 (不足なし・7 教室余裕) 谷和原中：最大 24 学級 (不足 11 教室)	伊奈中：最大 29 学級 (3 教室不足) 谷和原中：最大 13 学級 (不足教室なし)
	視点 2	伊奈中：最大 4.5km …① 谷和原中：最大 3.1km …② ①-②の格差 1.4km	伊奈中：最大 3.8km …① 谷和原中：最大 3.4km …② ①-②の格差 0.4km	伊奈中：最大 4.3km …① 谷和原中：最大 3.4km …② ①-②の格差 0.9km	伊奈中：最大 4.5km …① 谷和原中：最大 2.5km …② ①-②の格差 2.0km
	視点 3	伊奈中人口充足率：73% 谷和原中人口充足率：55% 格差 19 ポイント	伊奈中人口充足率：78% 谷和原中人口充足率：57% 格差 21 ポイント	伊奈中人口充足率：77% 谷和原中人口充足率：56% 格差 21 ポイント	伊奈中人口充足率：73% 谷和原中人口充足率：44% 格差 29 ポイント
	視点 4	小学校学区＝中学区学区の場合、小学校については、2 校とも許容範囲に収まる。	小学校学区＝中学区学区の場合、小学校については、(仮称)富士見ヶ丘小学校で不足教室が生じる。	小学校学区＝中学区学区の場合、小学校については、(仮称)富士見ヶ丘小学校で不足教室が生じる。	小学校学区＝中学区学区の場合、小学校については、陽光台小学校で不足教室が生じる。
	視点 5	平成 36 年以降、谷和原中ではキャパシティを超え、さらにピーク時では 7 教室不足する。	平成 35 年以降、谷和原中ではキャパシティを超え、さらにピーク時では 11 教室不足する。	平成 35 年以降、谷和原中ではキャパシティを超え、さらにピーク時では 11 教室不足する。	平成 38 年以降、伊奈中ではキャパシティを超え、さらにピーク時では 3 教室不足する。

## 視点1～5までの優先順位について

視点1～5については市としては、以下のように考えています。

視点1は1番目に優先される。施設のキャパシティを超えた形では十分な教育環境を提供しているとは考えにくく、施設キャパシティを超えないことが最も重視されるべきと考えます。

視点2は2番目に優先される。子どもにとっての教育環境を考えた場合、通学環境は重視すべき点であると考えます。しかし、教育を提供する場である学校施設の条件よりは下のレベルであると考えます。

視点3は3番目に優先される。地域への影響も十分考慮すべき内容であると考えます。しかし、子どもの教育環境が優先されるべきであり、優先順位としては3番目であると考えます。

視点4は必須条件と考える。小学校区域の組み合わせで中学校区域を構成することを基本としたいと考えます。

視点5は必須条件と考える。当面は既存の中学校での対応を基本としたいと考えます。しかし、条件を完全に満たさない場合は、できるだけ条件として優れたものが選択されるべきであると考えます。

### 優先順位1

#### 視点1 児童(生徒)の教育環境を考えた通学区域とする⇒ 増加分を分担し過大な学校をつくらない

—みらい平地区の人口増加は想定を超えた増加となっています。今後人口増加が見込まれる地区の児童生徒を片方の学校だけで負担すれば、学校の教育環境の質にも影響しかねません。将来の児童生徒の増加分を2つの学校で分担し、極端に過大な学校をつくらないように配慮しながら、適切な通学区域を考えていく必要があります。

### 優先順位2

#### 視点2 通学距離や通学時間、通学の安全性などを考慮する ⇒ 適正な通学環境を考える

—通学距離や通学時間、通学の安全性など、全体的な視点に基づいて通学環境を考えていく必要があります。そのため、2つの学区における通学環境に関して、総体的に適正さが確保できるような通学区域を考えていく必要があります。

### 優先順位3

#### 視点3 地域コミュニティを考慮したわかりやすい通学区域とする⇒ 現在・将来の居住者にも配慮する

—複雑な線形による通学区域の設定は、現在住まわれている方々だけでなく将来転入者となる方々にとっても、わかりにくく、不都合に感じる面が多々あります。できれば、住居表示や地形地物による分けとすることが望ましいと考えます。

—通学区を分けた際に、人口の充足度の高い学校区とそうでない学校区の格差が大きいと、みらい平全体のコミュニティの熟度\*が高まりません。みらい平地区全体のコミュニティ形成の底上げを考慮した通学区域を検討する必要があります。

※コミュニティの熟度は、街区の人口充足度(=ある街区の現在定住人口÷ある街区の計画人口)との関連性が高いと考えられます。例えば、人口充足度の高いところは、新たに転入する人口もそれほど多くなく、転入者同士の関わりも深くなっていると考えられるため、街区内のコミュニティの熟度は高いと思われます。

### 必須条件

#### 視点4 小中へのスムーズな学校生活を大切にする。⇒ 小学校区域との整合性を図る

—中1ギャップなど小学校から中学校への移行での課題が指摘されています。このことから考えても、基本的には、小学校区域と同じ線引きで中学校区域はあるべきだと考えます。

### 必須条件

#### 視点5 既存中学校を活用した案で考える。⇒ 既存中学校キャパシティを考慮した通学区域とする

—みらい平地区内の中学校については、土地利用計画により中学校用地が確保されていることから、今後も引き続き検討していくことが望ましいと考えられています。当面は既存中学校を活用する必要があり、既存中学校を活用した際に、中学校のキャパシティを超えない通学区域とすることが大切です。

区域案比較表（参考）

みらい平地区の小学校の通学区域（案）

	区域案1	区域案2	区域案3	区域案4
視点1 — 教育環境	○	×	△	×
視点2 — 通学距離	○	×	△	△
視点3 — わかりやすさ	○	○	△	○

みらい平地区の中学校の通学区域（案）

	区域案1	区域案2	区域案3	区域案4
視点1 — 教育環境	△	△	△	△
視点2 — 通学距離	△	○	△	×
視点3 — わかりやすさ	○	○	△	○
視点4 — 小学校区	○	△	△	△
視点5 — 既存校活用	△	×	×	△

- …適合する
- △…どちらともいえない
- ×…不適合